



1月28日昼の部

＜池袋演芸場の良さとは＞

池袋演芸場は、演芸場としてのステイタスは最も低く、入場料も安く、収容人員も93人と最も少ない演芸場である。その一方で演者一人当たりの持ち時間は他の寄席と比べて長めで噺家にとっては新しい演目や他の寄席ではできない演目を試す絶好の場となっている。観客の方も常連(?)が多く、演者と客の駆け引きも面白い。他の演芸場では観客全体が笑う感じなのに対し、ここでは1人1人の笑い方が違うのが分かるし、1人だけ笑っていても違和感がなく、ゲタゲタ笑う人、クスクス笑う人、いろいろである。ここには「独特の笑い」が存在している。

＜今回の「取り」はだれか＞

今回の「取り」は「台所おさん」。「おっさん」と呼ばれているそうですが、聞きなれない落語家でした。話は長屋の住人（八つぁん）が大家に結婚を勧められる。その相手が同じ長屋に住んでいて最近ご亭主を旅先で亡くした美人の奥さんだった。大喜びの八つぁん、これに対して不満なのは同じ長屋の独身者達。美人の奥さんが引っ越してくる日に、ご亭主の幽霊（友達の役者）を「天窓から忍び込ませ脅かす」というシナリオでした。「おっさん」は体を左右前後に動かしたり、半立ち状態となったりして、上半身を最大限使った大熱演でした。真に噂の池袋演芸場でした。見ているほうも熱が入り、大笑いして、外に出ても寒くはありませんでした。



今回の出演者達



鈴々舎馬るこ



取り：台所おさん



入船亭扇辰



青空 一風・千風



古今亭菊志ん



柳亭小燕枝



橘屋園太郎

<参加者の感想>

初笑いは「1年の健康と福を呼ぶ」ピッタリの企画だったと思う。池袋演芸場の出演者名にはテレビでよく見る落語家は見当たらなかったけれど、さすがにプロ、舌の良く回ること、想像力を掻き立てる間の取り方、身体を張ったオーバーなしぐさは汗も飛び散るようすごい！

小学生相手の落語では、昭和生まれの私達にはよくわかる「昔の長屋の生活」は説明を加えて話さないと理解してもらえないとか時代の変化を感じるエピソードでした。 薄井文子

脳活の一つとして笑いは絶対です。4K8Kと高画質のテレビで落語も見られる時代ですが客席100人足らずの狭い劇場で話家さんの声・しぐさ・目線そして鳥肌さえ感じる演技に感動しました。そして大笑い、一人でクスクス笑い、色々な笑いで脳活いっぱいです。 山本苗子

池袋演芸場は、近いのに行くチャンスがなく、良い機会と思い参加しましたが、貴重な体験をしてきました。出演者の名前を見ても知らない人ばかりでしたが、前から2列目の席だったので、表情・しぐさで一生懸命演じているのが、手に取るように伝わってきます。何も考えずに笑って過ごす時間は、楽しい貴重なひと時でした。

帰りに、池袋の駅の前に大きなフクロウのモニュメントがあり、池袋とフクロウの関係は？と思いながら、帰途につきました。今日の3時間は、心のオアシスのように、思えました。

斎藤博子

